学部生対象の職業倫理教育の実践的検討（2）
—対人援助職をめざす授業—

○宇惠 弘（関西福祉科学大学）
津田恭充（関西福祉科学大学）
谷向みつえ（関西福祉科学大学）
島井哲志（関西福祉科学大学）

キーワード：大学生，対人援助職，職業倫理

問題と目的

本研究では，第 1 報に引き続き職業倫理教育の実践事例について取り上げる。対象とした大学では，福祉，心理，教育，栄養，医療の対人援助職養成を行っており，その職業倫理教育は専門的な学修を進める中で身につけることになる。専門的な学修は上級学年に進むにしたがって増すが，それに先立ち，初年次教育の一つとして対人援助職の倫理綱領についての学修を取り入れている。

本研究の目的は，対人援助職の倫理綱領について学修する前後で，職業倫理に関する 3 つの側面，「職業的規範」「内面化した態度」「行動実践」に変化が見られるかを検討することである。

方　法

対象者と手続き

初年次教育の演習授業を受講した新入生 65 名を対象とした。秋学期の 15 回の授業内に 5 回連続で実施された「対人援助職に求められる倫理的姿勢の理解」をテーマとした演習授業の初回と 5 回終了時に 2 度調査を行った。

授業内容

対人援助職に求められる倫理綱領の作成を通じて，対人援助職に求められる倫理的姿勢を理解し，自己覚知を促す演習授業であった。最初の 3 回の授業では，グループワークによって「対人援助職の倫理綱領」を作成し，その中で示された姿勢を身につけるための具体的な行動を考える活動を行った。残る 2 回の授業では，前の 3 回の学びを演習内で発表し，振り返りを行うことで学修成果の定着を図った。

調査内容

職業倫理に関する 3 種類の調査を実施した。いずれの項目も 5 件法で回答を求めた。

1.「心理学の専門家が，対象者・クライエントの権利と尊厳を守ることは大切だと思う」といった「職業的規範」に関する 5 項目。

2.「私は，自分の周囲の人たちを傷つけず大切にしたい」といった「内面化した態度」に関する 5 項目。

3.「私は，自分の周囲の人たちに，気持ちのよいあいさつをしている」といった「行動実践」に関する 8 項目。

結果と考察

3 種類の調査内容間に得点差が見られるのか，また，5 回の授業実践を通じて，職業倫理に関する 3 種類の調査内容に変化が見られるのかを検討するために，二要因参加者内分散分析（職業倫理（3）×前後（2））を行った。その結果，職業倫理と前後にそれぞれ主効果が見られ（職業倫理：$F(2,128)=66.6$, $p<.01$, $\eta^2=.51$；前後：$F(1,64)=6.3$, $p=.02$, $\eta^2=.09$），下位検定（Bonferroni）の結果は，「職業的規範」＞「内面化した態度」＞「行動実践」，pre＜post であった（Figure 1）。

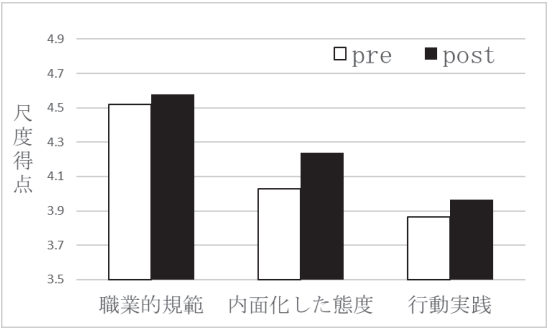

Figure 1　3 種類の職業倫理とその変化

第 1 報と同様に，内面化した態度や行動実践と比較して，職業的規範意識は学修以前から高いレベルにあり，規範意識は持ち合わせているが，それを態度や行動で表すことは難しいことが示された。一方，5 回の授業による学修の効果が示され，対人援助職の倫理綱領を考え，情報を共有し，倫理的姿勢を学ぶことによって，職業倫理に対する態度や行動等は向上することが示唆された。

対人援助職に求められる倫理的姿勢を以後も継続して保持できているか引き続き検討する必要がある。しかし，倫理綱領について考え，倫理的姿勢を学ぶことによっても職業倫理に対する態度や行動等が向上したことから，上級学年に進み，実習等の実践授業を含む専門的な学修が増えることによって，職業倫理に対する態度や行動等がさらに向上することを予想させる結果が得られた。

付　記

本研究は，令和元年度関西福祉科学大学の共同研究費の助成を受けた。